

unicef 

ユニセフ Vol.15 No. 59

大阪通信

大阪ユニセフ協会ニュースレター
Vol.15 No.59/2015年8月15日発行戦争は目の前にある
という認識を持つ

小学生の6年間は、毎年8月の終戦記念日近くに登校が定められ、戦争に関する資料やビデオを見て感想文を書いた。普段の道徳の時間にも、戦争映画を見たり、学校文庫や図書館にあった戦争に関する絵本や漫画を読む機会が設けられていた。林間学校や修学旅行では広島と長崎へ訪れて原爆資料館や平和公園に行き、被爆者の方の話を伺った。体験したことがないからこそ、戦争の卑劣さや悲惨さ、恐怖を徹底的に教え込まれた。

個人的な話だが、私の母方の祖母は広島の尾道出身で、疎開先で原爆を見たと言った。幸い被爆せず助かり、その命は私に受け継がれている。

この原稿を書くにあたって、大阪森ノ宮駅近くにある「ピースおおさか」へ出掛けた。大阪大空襲の当時の資料やそのときの様子を再現している。そのなかに防空壕体験のブースがあり、入って体験した。真っ暗なかで燃える炎が見え悲鳴が聞こえ、体が震え怯えた。当時この体験をしていたのだと思うと、嫌な気持ちで一杯になった。



学童疎開先の食事風景。栄養不足がひどかった。
提供：ピースおおさか

語り継いでいく 戦争の悲惨さ



1945年、空襲によって灰燼に帰した大阪市難波方面。正面に焼け残った高島屋が見える。
この年、大阪は8回も繰り返し米軍による空襲を受けた。提供：ピースおおさか

何もかも焼けてなくなり、多くの死者を出す戦争は、人間のすべてを奪う行為だ。

戦後70年が経って、戦争を体験したことがない世代が大多数となった。その間、語り継がれてきた戦争は、教え伝えてくれる方も自身の体験でなく、歴史で学んだことが多くなった。実体験の重みが薄れ、戦争に対する意識が低くなってきている。さらに恐ろしいのが、無関心で何が起きていたのかを知らない世代が増えてきていることだ。戦争は遠い国で起こっている出来事ではなく、私たちの目の前にある認識を持つことが必要だ。戦争の悲惨さを伝え、繰り返してはいけないことと、現在の平和の幸せを伝え、保持

していく大切さを伝える二面が必要だと思う。

子どもたちには想像しやすい言葉で伝えていくのがよいのではないか。「今みんなが学校へ行って勉強したり友達と遊んだり、面白いゲームができて本を読めるのは平和だからこそだよ」と伝えれば、平和の有難さを想像しやすい。そして、それはなぜかと問うて意見を述べてもらうことだ。意見を述べることで、今後どんな行動が平和維持につながるか考え、実行に移していく。戦争が引き起こす理不尽さを誰もが永遠に体験することがない「戦争絶滅の世界」へ——。体験したことはなくとも二度と繰り返さない、今の平和を大切にしていくことを、私も伝え継いでいきたい。(前田真子)



ピースおおさかで開催されたユニセフ写真展

contents

- 活動フォトニュース 2
- 学習講師研修会に参加して 3
- シリーズ この人に聞く 第2回
山本敏晴さん〈国際協力の意義〉 4
- 活動日誌(5月~7月) 7